

.....

現在15ある都道府県単位のコンクリート診断士会のなかで最も早くできた福井県コンクリート診断士会。出口一也氏は監査役として会の運営に参画している。福井県の職員として土木施設の整備や維持管理に携わるうえで、診断士会での人脈が役立っているという。

出口氏は、県の職員として2002年に配属された部署で、県が管理する漁港の拡張工事を担当することになった。工事では大量のコンクリートを使用する。出口氏は「高い品質を確保するためには発注者も勉強が必要」と考え、コンクリート技士を取得したうえで職務に臨んだ。

拡張工事では既存施設の状態を把握する必要も生じる。塩害で劣化した漁港施設の現況調査には、当時生

活用の達人に学ぶ

まれて間もないコンクリート診断士の有資格者が当たった。このことをきっかけに、出口氏は診断士の資格に注目。06年3月に取得して福井県の診断士会に入会した。

しがらみ抜きで交流できる

福井県コンクリート診断士会は、発足当初から行政のほかにも生コンクリートのメーカー、建設コンサルタント会社、建設会社など、様々な分野から会員が集まっていた。

出口氏にとって、この会員の多様性が大きな魅力となった。官民の会員があくまで個人の資格で参加しているため、受発注のしがらみ抜きで交流できるからだ。

例えば道路橋示方書の改訂時に、ある部位で新たに推奨仕様となったコンクリートが、県内で十分に流通しているかどうか気になったことがあった。出口氏は、メーカーである福井宇部生コンクリート出身の石川

裕夏・福井県コンクリート診断士会会長に質問。情報を入手した。

道路保全課に在籍していたときには、既設道路の補修に関して診断士の様々な会員に相談した。「既設コンクリートの補修技術は発展途上で、いろいろな人の知恵を借りる必要がある。気軽に相談できる技術者仲間

間ができて本当に助かる」(出口氏)。

診断士会では、既設コンクリート構造物の点検や補修の現場見学会を時々開催している。出口氏も一見学者として参加する。

特に勉強になった見学会の一例は、10年11月に開かれた「青戸の大橋」での電気防食工事の見学会だった。青戸の大橋は福井県おおい町の小浜湾に面している1973年完成のコンクリート橋だ。補修工事の発注者はほかならぬ県だったもの



福井県コンクリート診断士会が2010年11月に開いた「青戸の大橋」電気防食工事の見学会(写真:福井県コンクリート診断士会)

の、担当者ではない出口氏にとって、見学会は現場を見るいい機会だった。

「土木専門の私にとって、電気はややとっつきにくい分野だ。見学会の形で分かりやすい説明が聞けて、得るものが大きかった」。出口氏は見学会の感想をこう語っている。

30歳代半ばとまだ若い出口氏は、次のように言葉を継ぐ。「定年後も老朽化した橋梁への対策など、コンクリート診断士を持つ技術者としてやれることがたくさんありそうで、今から楽しみ」。

福井県 福井土木事務所地域整備第二課福井南グループ主任

出口 一也氏

でぐち かずや

1978年生まれ。97年3月に福井県立武生工業高校都市工学科を卒業し、同年4月に福井県庁に入庁。06年にコンクリート診断士を取得し、11年6月から診断士会監査役を務める。08年に県が開始した橋梁長寿命化修繕計画に職員として参画している。12年4月に福井土木事務所地域整備第二課福井南グループ主任に就任

「相談できる
技術者仲間ができた」

